

腹部超音波（エコー）検査

腹部超音波検査は超音波の反射波を画像にし、主に肝臓・胆のう・膵臓・脾臓・腎臓などに病変がないかを観察する検査で、腸管などにガスがあると観察できない時もありますが、胎児の観察に使用されるなど、安全で有用な検査です。

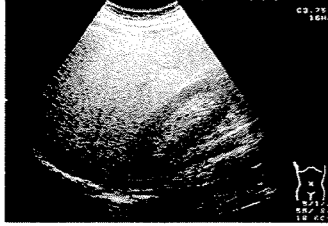
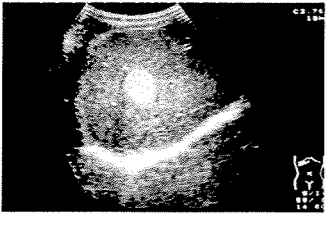
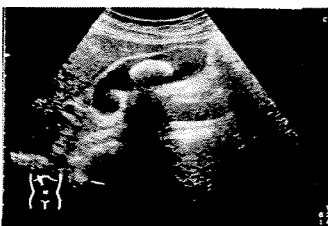
※注意

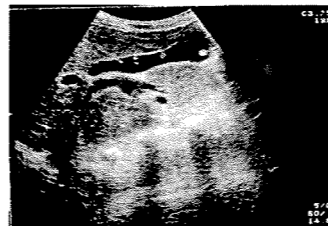

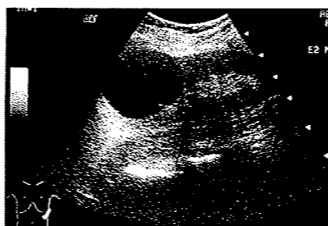
- ①検査当日の朝食は摂らないで下さい。（絶食にて受診ください）
- ②胃部レントゲン検査（バリウム）を同時に受診される場合は、必ず腹部超音波検査を先に受けて下さい。

検査方法は・・・

胸下から腰骨辺りまでを出し、検査用ゼリーを体表面に塗ります。
腹式呼吸の要領でお腹を膨らませ、数秒間息止めをしていただき観察します。

検査結果の判定と対策

所 見	内 容
脂肪肝 	肝細胞に脂肪（主に中性脂肪）が蓄積された状態をいいます。症状は特にありませんが、進行すると倦怠感・疲労感・食欲不振などの一般的な肝臓病の症状が出現します。原因としては、肥満・過食・アルコール・糖尿病・内分泌異常・薬剤などがあります。それらの原因を解消することが一番の治療法で、薬剤など特殊な場合を除いては食事療法や運動療法が基本となります。
肝血管腫 	肝臓にできる良性腫瘍で、先天異常や血管増殖などによって腫瘍となったものをいいます。小さな血管腫ができることはよくあり、治療が必要になることはあまりありません。しかし、大きくて肝臓の辺縁にあり、破裂の危険性があるものや、時間とともに大きくなるもの、及び症状（腹痛や腹部圧迫感）があるものなどは手術などの治療が必要なことがあります。
肝のう胞 	水分がたまった袋状のものが肝臓内にあるものを『のう胞』といい、生まれつき腎臓や肝臓にのう胞がある場合や、寄生虫によってもできることがあります。通常は症状ありませんが、のう胞が巨大な場合には黄疸や、腹部の圧迫感がでたりすることがあります。腹痛などの症状があれば治療をしますが、のう胞が小さく単発性の場合には特に治療を必要としません。
胆のう結石 	胆のう内にできた石のことで、種類によって、大きさ・数・溶けやすさ・壊れやすさが異なります。症状は人それぞれで、無症状の場合がほとんどですが、胆石が詰まってしまった場合は、激しい右上腹部痛をとめない緊急の処置が必要になることもあります。症状がない場合に普段気をつけることとして、カロリーや脂肪（コレステロール）の摂取制限や、適度な運動があります。

所 見	内 容
胆のうポリープ 	胆のうの内部へ突出して隆起する病変のことで、ほとんどの場合が無症状で、コレステロールポリープであることが多いが、中には良性腫瘍やガンであることもあります。大きさや形によって判断が違ふことがあり、特にだんだん大きくなっていくものなどは要注意です。適切なフォローを行って下さい。
腎結石 	尿中に含まれるカルシウムや尿酸などの成分が、腎臓内で結晶化したものです。通常は結石が移動しなければ痛みはありませんが、移動して腎臓の出口でつまってしまう場合は、腎機能の低下につながるため、早急に治療が必要です。また、腎からつながる尿管に結石が移動する場合にひっかかりたりすると、背中やわき腹に激痛を訴え血尿が出ます。
腎のう胞 	水分がたまった袋状のものが腎臓にあるもので、通常は症状もなく、腎機能にも影響はありません。のう胞が大きくなったり多発する場合は、将来的に腎機能に影響が出ることもあります。